

頓珍漢素人俳壇

本学園の
学生・教職員の方々から
投句いただきました。

色白し ページに勝る 百合の花

夢の露

貸しボート 父に漕がせて 漫画読む

多誤作

水芭蕉 思いは巡る 尾瀬の旅

ハル

文字の海 上を撫でゆく 夏の風

杏子

夏休み 共に喜び 共に泣く

多聞

麦わらと リュックにつめる 課題図書

遊亀

本を開く 窓に聞こえる 応援歌

楽葉

図書整理 窓の向こうに 夏の雲

楽書

葉桜に 法衣なびかせ 修行僧

うらら

夏の陽の 輝きに読む 「異邦人」

蒼猿

折返す

バスに客なし

夕河鹿

押川ケイ

夏の名句

●俳句の説明

夕方という時刻と無人のバスという設定からして、終発のバスが山峡を通過する光景を想像したものだろうが、そんなバスの外から河鹿の鳴き声が聞こえる。それが閑散とした車内、山峡、間もなく日没を迎える空に、よりもの悲しい彩りを添えている。

夏の
図書館を
詠む

この句は
本学の所蔵資料
から

飯田龍太著

『鑑賞歳時記 第二巻 夏』

〔角川書店 1995〕

請求番号：911.36[Ida]2

本館書庫 BF